

民主島根

2022年
6.19
第1407号

発行所 松江市袖師町3-6 TEL 0852-24-2444
日本共産党島根県委員会 FAX 0852-24-6369

松江、出雲で共産党演説会 原発ゼロでぶれない党伸ばして 井上、にひ、福住が演説



聴衆の声援に応える（左から）福住参院選挙区予定候補、井上参院議員、にひ参院比例予定候補（出雲市朱鷺会館）

日本共産党の井上哲土参院議員は4日、松江市出雲市で、にひそうへい参院比例予定候補、福住ひでゆき参院鳥取・島根選挙区候補とともに街頭などで演説しました。うなずきながら聞く人の姿が多く見られました。

井上氏は、2日に島根県知事が島根原発2号機の再稼働に同意したことについて、「一度事故が起されれば取り返しつかない事態になる。島根原発は全国でただ一つ県庁所在地にある原発です」と批判。「原発利権と一切無縁、原発ゼロでぶれることのない日本共産党を伸ばして原発再稼働ノーの声を突きつけよう」と力を込めました。

次いで井上氏は「食料品や生活必需品の高騰は



尾村県議の一般質問 2号機再稼働中止を要求

コロナやウクライナ危機の影響だけでなく、異次元の金融緩和で円安を進めてきたアベノミクスの失政だ」と指摘。「大企業と富裕層に自分の負担を求めて、消費税を減税することこそ国民の声で

5月県議会の論戦から

日本共産党の尾村利成県議は3日、一般質問に、大田陽介県議は8日、一問一答質問に立ち、県知事や教育長、県執行部をたどしました。（2面に続く）

「す」と訴えました。にひ氏は「暮らしを守るのも戦争を止めるのも民主主義の力です。憲法こそ希望。弁護士としての私を先頭に、共産党の比例5議席を必ず勝ち取らせてください」と支持を求めました。

る避難計画が未策定など、不安が渦巻いている」と強調。丸山知事に「県民合意は得られているのか、県民の命と安全を守るのか」と迫りました。

尾村氏は、5月に島根原発で発生した運転免許証偽造による不正入構で、原因究明や再発防止策が示されていないと指摘。丸山知事が昨年9月、中電幹部に「中電は安全の意識が低く、緊張感や責任感が著しく不足している」と苦言を呈しながら再稼働を認めたことは「知事が県民の命を守る責任を放棄したことであり、『安全神話』に浸かっていることになる」と批判しました。

丸山知事は「住民の不安や懸念、原発の課題解決に向け、県として最大限取り組みをいく」と述べました。

尾村県議は、丸山達也知事が2日、中国電力島根原発2号機の再稼働同意を表明したことについて「県民からは不正続きの中電への不信や実効あ

る避難計画が未策定など、不安が渦巻いている」と強調。丸山知事に「県民合意は得られているのか、県民の命と安全を守るのか」と迫りました。

尾村氏は、停止中原発の速やかな再稼働に向けて、原子力規制委員会の審査の効率化で再稼働を促進すべきとの議論もなされているとして「再稼働に前のめりの国任せ、国に迎合の姿勢ではなく、県として主体的に取り組むべき」と強調。その上で、「再稼働の条件は、中電の適正運転が担保されていることであり、適正運転が担保されなければ、県として安全協定第12条『適切措置要求権』を発動し、原子炉停止を決断すべきだ」と強く求めました。

大田県議の一問一答 男女の賃金格差是正を



大田県議は、地方における男女の賃金格差が女性の社会減の理由の一つと指摘されているとして「地方の再生」のためにも是正が急がれると強調しました。

丸山達也知事は「賃金格差の是正は）女性の社会流出を防ぐことにつな

「しまね女性の活躍応援企業」に登録している誘致企業の割合は5・8%（257社中15社）と説明し、「登録が増えるよう、企業フォローアップの機会に働きかけると答えました。

大田氏は、労働者30人以上以上の企業に男女の賃金格差の公表が義務付けられるようになったとして、「誘致企業の格差の実態把握とともに、格差是正に向けた計画の策定を求めると、誘致企業に対し、積極的な対応を」と要求。田中商工労働部長は「関係機関と連携して取り組みを進めていく」と応えました。

鼓動

「話し合いで解決しよう、自分たちの防衛は何もしない。そんな国の話を誰が聞いてくれるのか」とは、去る十一日、さいたま市大宮駅西口で行われた日本維新の会の街頭演説での一節だ▼さすがが改憲の騎手、「専守防衛」見直しと「核共有」論の開始を公約に掲げる党ならではの発言である。

しかしここには決定的に欠けているものがある。それは他者へのリスパクトと、コミュニケーションへの期待と信頼だ▼哲学者であり政治運動家であった鶴見俊輔の著書には、言語学者ロイヤン・ヤコブソンから聞いたというこんな話が紹介されている。ある人類学者が離れ小島で島の住民の習慣を研究しようとしたが、数ヶ月経っても自分の言葉をわからせることができなかつた。それは住民が学者を自分たちと同じ人間だと考えなかつたことが原因だった、と▼鶴見はこの逸話を受けて次の指摘をしている。「人間でないものが、どんな音を出そうとも、その音の意味を解き明かそうと真面目に考える人は少ない。反対に相手と同じ人間だと考えるところからは、なんとかして自分の身に引き比べて相手の音や身振りの意味を考えてゆくから、互いの言葉など全然知らないのに言葉は通じてゆくものなのだ」▼つまり、対等な者同士としての互いのリスパクトと共に、まずは伝えたい想いがあり、次にそれは必ず伝わるはずだという、コミュニケーションという行為への期待と信頼があればこそ、言語による「対話」が生み出せるということだろう。それを否定し最新鋭の武器を持つ貸してくれるはずはない。（江）